

現代美術の祭典「第2回横浜トリエンナーレ」



●ダニエル・ビュラン「海辺の16,150の光彩」(横浜トリエンナーレ2005のための現場に即した作品)
写真:安齋重男

世界各国から、 86名のアーティストが参加。

◆2005年9月28日から12月18日までの82日間にわたって「第2回横浜トリエンナーレ」が開催されました。今回は世界30カ国・地域から86名のアーティストが参加。総入場者数は19万人にものぼりました。この数は2005年度内に日本国内で開催された現代美術展としては最大です。実施体制は、「第1回横浜トリエンナーレ」に続いて、ジャパンファウンデーションに横浜市、NHK、朝日新聞社を加えた4者共催。会期中は1,200名以上のボランティアの協力も得ることができました。

メイン会場は「第1回横浜トリエンナーレ」のパシフィコ横浜から、山下ふ頭の3号・4号上屋へと移動し、中華街や山下公園内にも一部作品が設置されました。従来は上屋として使用されているメイン会場の空間構成は、ワークステーションを中心として結成された建築家チームWS+AMFが行いました。開放的な雰囲気の中で、大小の様々な作品が非常に映えるダイナミックな空間が誕生しました。



※「トリエンナーレ」ってなに?

「3年に一度開かれる国際美術展」のこと。「トリエンナーレ」(triennale)は、イタリア語で「3年に一度」を意味します。



●KOSUGE1-16+アトリエ・ワン+ヨココム「アスレチッククラブ4号プロジェクト」



●参加作家の奈良美智と西野達郎の特別対談。司会は川俣正。
写真(上・下):黒川未来夫

全体テーマは、 「アートサーカス(日常からの跳躍)」。

◆総合ディレクターには川俣正氏が指名され、氏は3名のキュレーター(天野太郎、芹沢高志、山野真悟の各氏)とともに展覧会の企画構成を行いました。全体テーマは「アートサーカス(日常からの跳躍)」。「何が飛び出すかわからない」「非日常的な体験」といったキャッチフレーズとともに、川俣氏自身がアーティストとしてこれまで標榜してきた「運動態としての展覧会(ワーク・イン・プログレス)」というコンセプトにも相通するダイナミックな展覧会が実現しました。

横浜トリエンナーレ2005の大きな特徴のひとつに、多種多様な関連イベントの実施があげられます。山下ふ頭の会場での作品展示以外にも、パフォーマンスやダンス、映画、音楽、詩の朗読等のソフトプログラムが会期中連日にわたって実施され、トリエンナーレを盛り上げました。また、同時期に現代美術の展覧会を開催していた首都圏の美術館と協力したスタンプラリーや、子供向けから大人向けまでの様々な教育プログラムも実施され、計215回のガイドツアーには約3,300名が参加しました。

街を舞台とした国際美術展。

◆メイン会場の外では、ダニエル・ビュランによる三角旗で飾ったインスタレーション、ビュラン・サーカス・エトカンによるサーカス、ルック・デルーによる4つのコンテナをアーチ状にくみ上げた作品、西野達郎による「ヴァイラ會芳亭」などの大型プロジェクトが市内各地に出現しました。横浜の日常の景色は一変して祝祭性を帯び、日頃現代美術にあまり親しみのない市民の方々にとっても最先端の表現を体感できる貴重な機会となりました。

東京国際芸術祭

イスラエルのコンテンポラリー・ダンスと、クウェートの現代演劇を上演。

◆東京国際芸術祭がNPO法人アートネットワーク・ジャパンの主催で、2006年2月10日から3月27日まで46日間にわたって開催されました。この芸術祭に、ジャパン・ファンデーションは事業共催として参加。イスラエルとクウェートの劇団の招へい公演を行いました。

イスラエルからは、世界中から熱い視線を集めている新進気鋭の振付家ヤスミン・ゴデールが来日。イスラエルのダンスシーンで語られることのなかった極めて

政治的・社会的な問題に正面から取り組み、大きな衝撃と賞賛をもって迎えられた問題作「ストロベリークリームと火薬」を公演しました。

クウェートからは、アラブ演劇の若い旗手スレイマン・アルバサームが再来日。日本・イギリス・クウェートの国際共同制作による新作「カリラ・ワ・ディムナー王子たちの鏡」を発表しました。現在アラブ世界に生きる芸術家や哲学者が直面する問題が鋭く投影された作品です。



TIF

第10回アジア漫画展

77点の作品を通じて、アジアの社会や文化、暮らしを紹介。



祖安(マレーシア)作品

◆漫画という親しみやすい表現を通じて、アジアの社会や文化、暮らしを多角的に紹介することを目的に、ジャパ

ンファンデーションでは、1995年以来毎年「アジア漫画展」を開催してきました。第10回目を迎えた2005年度のテーマは、「アジアの環境問題」。カンボジア、インド、中国、インドネシア、日本、韓国、マレーシア、フィリピン、タイ、ベトナムの第一線で活躍する10名の漫画家の新作77点を2005年10月22日から11月11日まで国際交流基金フォーラムに展示しました。

また、展示会初日には、同会場でアジアの環境問題についての討論会も開催しました。

Cartoon Exhibition

アジア、大洋州、中南米、中東理解講座

異文化を様々な角度からわかりやすく解説。

◆第一線で活躍する専門家の方々に講師として招き、2005年度もアジア、大洋州、中南米、中東理解講座を東京で開催しました。

アジア理解講座では、「アジア各国の教育の理念と現実-各国の教育戦略と課題」、「スリランカ…和平構築の道のり」など8講座を開講しました。また、日豪交流年を記念して、大洋州理解講座「オーストラリア

を知るために-多文化・ミドルパワー」を開催。

中南米理解講座では、「中南米入門:グローバル化と地域性」など2講座を、中東については、「アラブ・ミュージック-その深遠なる魅力に迫る」など6講座を開講。受講者からは、「内容が豊かで勉強になった」「満足している」「問題点が端的にわかった」という感想を頂きました。



アラブ映画祭

イラクの最新作から、アラブ諸国の大ヒット作までを上映。

◆日本初のアラブ映画祭を、2005年4月15日から24日まで国際交流基金フォーラムで開催しました。上映作品17本のほとんどが日本初公開。その第1部の「イラク映画回顧展」では、現存する最古のフィルムから、最新作までを紹介しました。たとえば「露出不足」は、フセイン政権崩壊後の混沌とした社会状況を背景に、病に蝕まれながらも映画に情熱を傾ける男性や、初めて友情を知るホームレス男性の姿などを通して、イ

ラクの新たなリアリティを探る意欲作です。

第2部の「アラブ新作パノラマ」は、エジプトやチュニジア、シリアなどのアラブ諸国の大ヒット作をラインアップしました。「ラミラの白い嵐」(イスラエル)、(2003年ベネチア映画祭銀獅子賞受賞作)。「カサブランカの天使」(モロッコ)、(2004年カルタゴ映画祭金賞受賞作)などが上映されました。



感性を開く

第12回 Bangladesh・ビエンナーレ

アジア諸国を中心とする現代美術の国際展に、藤浩志と照屋勇賢が参加。

◆「Bangladesh・ビエンナーレ」はBangladesh・シルパカラ・アカデミーが主催し、1981年から首都ダッカで実施されている、アジア諸国を中心とする現代美術の国際展。第12回は33カ国から348名のアーティストが参加しました。

日本からはNPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ（通称：AIT/エイト）のコミッショナーのもと、藤浩志と照屋勇賢が参加。私たちの身の回りにある素材や、

すでに使われた中古の日用品を使って社会に新しいシステムを提案する2人は、オスマニ記念ホール吹き抜け空間におもちゃと詩の交換プロジェクトを展開し、生活廃棄物による鳥を飛び交わせ（藤）、ダッカの商店の紙袋やトイレットペーパーから樹木を生み出しました（照屋）。藤はIran、Bangladeshの作家とともに優秀賞を受賞しました。



●提供：NPO法人 アーツイニシアティヴトウキョウ

「アジアのキュビズム」展（日本・韓国・シンガポール）

調査から展覧会実現まで、すべてのプロセスを共催者間で共有。

◆東京、ソウル、シンガポールの国立美術館3館とのアジア初の共同企画展である「アジアのキュビズム」展。アジア全域が共有する「近代」というテーマを考察すべく、近代美術史のなかで最も典型的なキュビズム様式を取り上げ、調査から展覧会実現まですべてのプロセスを共催者間で共有しました。

この企画展は、二国間交流を越えたマルチの交流事業としての評価に加え、共催機関がほぼ均等な経費分担を行い、平等な立場で事業を共催したという点でも重要な意味を持っています。激動の20世紀を経験したアジアの一員であるという認識を共有する契機となって、一般観客からも高い評価を獲得しました。

国際シンポジウムも3都市において併催されました。



●東京展



●ソウル展

日韓 Dance 交流フェスティバル

◆日本で生まれ世界に衝撃を与えた現代舞踊である「舞踏」を中心に、ダンスの分野における日韓交流を目的に、公演、シンポジウム、ワークショップ、展示等、さまざまな角度から舞踏を体系的に紹介する「舞踏フェスティバル」と、日韓のコンテンポラリーダンスの新進アーティストが競演する「現代舞踊フェスティバル」の2つのフェスティバルから構成されました。日本の舞踏、コンテンポラリーダンスが韓国でまとまった形で紹介される初め

での試みです。ダンスの公演やワークショップのほか、日本の現代舞踊に関するシンポジウム、舞踏の系譜をたどる展示、映画上映会等も合わせて行われました。



●日韓友情年2005事業

※「ビエンナーレ」ってなに？

「ビエンナーレ」(biennale)はイタリア語で「2年に一度」。そこで「2年に一度開かれる国際美術展覧会」を表します。なかでもっとも古い歴史を持つのが「ヴェネチア・ビエンナーレ」。100年以上の歴史があります。

Festival International Cervantino

セルバンティエーノ国際芸術祭(メキシコ)

ラテンアメリカ最大の芸術祭に日本の現代芸術を紹介して反響を呼ぶ。

◆メキシコ中部の都市グアナフアトで毎年開催される「セルバンティエーノ国際芸術祭」は、ラテンアメリカにおいて最も重要な芸術の祭典として知られています。2005年には第33回を迎え、世界32カ国あまりから、合わせて約2,500名ものアーティストが参加する大規模なものとなっています。2001年からは、毎年、特別招待国が指定され、その国の芸術が数多く紹介されますが、2005年は日本がその指定を受けました。

そこで、ジャパンファウンデーションでは、現代的、革新的な日本の芸術を紹介したいという芸術祭側の意向をもとに、舞台芸術分野では、舞踏家・笠井穀による作品『花粉革命』、大阪に本拠を置く劇団維新派

による世界初演作品『ナツノヒラ』、同芸術祭のオープニングを飾った国際共同制作オペラ『夕鶴』の上演を実施したほか、MIYAZAWA-SICK BAND、Rin'、Gocooの各音楽グループの参加に助成しました。

また、造形美術分野としては「現代日本のデザイン100選」展、「日本の現代建築」展、「現代日本のポスター」展などを実施し、現代日本の芸術の多様な側面を紹介しました。これらの催しには大勢の観客が訪れるとともに、マスメディアでも多数採り上げられました。



● 作品「ナツノヒラ」



● 「現代日本のポスター」展

PAJ Performing Arts Japan(北米)

米国で実施される日本の舞台芸術紹介事業をジャパンファウンデーションが助成。

◆米国のNPO法人により米国内(およびカナダ)で実施される日本の舞台芸術紹介事業に対して、1.ニューヨーク、ロサンゼルスなどの主要都市だけでなく、日本の舞台芸術に触れる機会が少ない地域における事業を拡大すること、2.日本の舞台芸術に対する理

解を深めるための教育的プログラムを、米国の舞台芸術専門家や一般市民へ提供すること、3.日米両国の舞台芸術家による共同制作を推進すること、の3点を目的に助成を行っています。本プログラムの事務局はニューヨーク事務所に設置されています。



● PAJ(北米)事業「新田親子」

映画上映会 北米巡回「成瀬巳喜男監督特集」

日本の“知られざる巨匠”の作品を米国とカナダの各地で上映。

◆米国で最初に商業公開されたトーキーの日本映画はなにか?映画業界の外でこの問いに答えられる人は少ないのではないのでしょうか。実は、『Kimiko』と改題されて公開された成瀬巳喜男の『妻よ薔薇のやうに』こそがこの栄えある作品です。しかしながら、日本国内で常に高い評価を受けてきたこの監督は、意外にも北米では“いまだ見出されざる”監督の一人でした。

ジャパンファウンデーションは、トロントのシネマテーク・オンタリオと共同で小津・黒澤・溝口を知る映画ファンにとっても遠い存在であった「第4の巨匠」成瀬巳喜男の巡回上映会を、2005年9月から2006年4月にかけて実施しました。ニュープリント28作品を含む、サイレント時代の作品から遺作となった『乱れ雲』までの34

作品を米国とカナダの14都市、18会場で巡回上映したこの大型助成事業は、各開催地で数千人単位の入場者を集めました。

エドワード・ヤンやスーザン・ソントグといった映画監督や評論家が寄せる賛辞だけを頼りに、Naruseの作品に憧れてきた観客に、実際に作品に接する機会を提供することができたことはジャパンファウンデーションにとっても大きな喜びです。



感性を **開く**

「日本の知覚」展(オーストリア・スペイン)

Chikaku

オーストリアとスペインで、日本の現代美術を読み解く企画展を開催。

◆日本・EU市民交流年事業の一環として、グラーツ(オーストリア)のクストハウス及びビーゴ(スペイン)のビーゴ現代美術館において、「Chikaku: Time and Memory in Japan」と題する展覧会を開催しました。

岡本太郎が50年代に撮影した縄文土器の写真作品から出発し、「知覚」をキーワードに日本の現代美術を読み解こうとする展覧会です。森山大道、中平



●クストハウス・グラーツでの展示風景

卓馬、杉本博司、渡辺誠、森脇裕之、やなぎみわ、伊藤高志、草間弥生、笠原恵美子、日高理恵子、須田悦弘、中村哲也、小谷元彦、曾根裕、トリン・ミンハ、山田正亮等の本展のために制作された新作を含む作品を展示。

ステレオタイプな日本像を打ち破る斬新な視点が注目を浴び、ビーゴでは2003年の美術館オープン以来最大の観客数(21,392人)となりました。2006年度には岡本太郎美術館で帰国展を開催しました。

「転換期の作法—ポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリーの現代美術」展(大阪・広島・東京)

Positioning In the New Reality of Europe



●東京都現代美術館での展示風景

社会主義体制崩壊後のヨーロッパの現実を多角的に体験。

◆国立国際美術館、広島市現代美術館および東京都現代美術館との共催による国内巡回の展覧会。中・東欧地域4カ国から計11組の作家・グループによる、絵画、立体、

写真、映像、体験型の作品などさまざまな形の約70点の作品を展示しました。

初めてこの地域の現代美術に触れる観客も多く、また出品作品の大半が2000年以降に制作されたものであったことから、社会主義体制崩壊のあとの新たなヨーロッパの現実を多角的に体験することのできる絶好の機会となりました(日・EU市民交流年参加事業)。

第51回ヴェネチア・ビエンナーレ美術展(イタリア)

Venice Biennale



日本館展示は石内都個展、コミッショナーは笠原美智子、女性の活躍が目立った第51回展。

◆現代美術最大の祭典「ヴェネチア・ビエンナーレ美術展(第51回)」の日本館展示は、写真家・石内都による「マザーズ 2000-2005 未来の刻印」と題する個展となりました。母親の遺品や、死の直前に肌を撮影した連作「mother's」シリーズから最新作を含む35点のほか、映像作品を展示しました。

今回、約20年ぶりにあらわになった日本館本来の大理石の床が、方形の空間にアクセントを添えました。「作品と空間双方で、過去と未来が交差する」というコミッ

ショナー笠原美智子氏の意図が見事に反映され、同ビエンナーレ史上初めて総合ディレクター2名が女性という、「女性」に関心の集まった今回のビエンナーレを象徴する展示のひとつとなりました。会期中のべ観客数は約91万人、日本館入館者も約13万人を数えました。2006年に帰国展が東京都写真美術館で開催されました。



舞台芸術Webサイト Performing Arts Network Japan <http://performingarts.jp/>

PAN

◆日本の現代舞台芸術情報を海外に発信することを目的として、毎月更新する日英2カ国語のウェブサイト運営しています。アーティスト・インタビューおよび今月の戯曲紹介、新世代のアーティストたちのプロフィールおよび作品データを収録したデータベースを通じて、多様で刺激的な日本の舞台芸術の最新状況を紹介

しました。

また、世界の舞台芸術の動向にも注目し、フェスティバルや芸術見本市を取り上げるとともに、活躍する海外プレゼンターのインタビューを掲載し、舞台芸術分野における国際交流の活性化に努めています。

日本アニメーション紹介派遣（日本紹介のための文化人派遣）

Animation

**人気のアニメクリエイターを各国に派遣。
会場はアニメファンの熱気に包まれる。**

◆「日本紹介のための文化人派遣」事業は、伝統文化からポップカルチャーまでの多岐にわたる分野の専門家を海外に派遣し、レクチャー、デモンストレーション、ワークショップなどの形で日本を紹介し、異文化の人間同士が触れ合うことをめざした、まさに『人に始まり、人に終わる』文化交流の根幹を成す事業といえます。

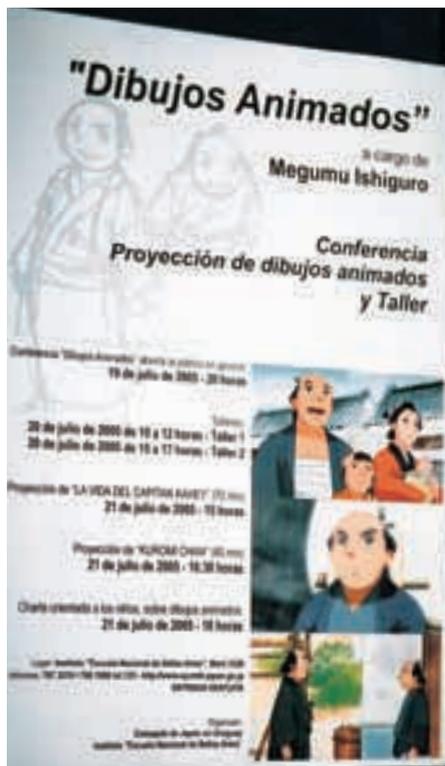
小規模で効果的な「小回りの利く事業」として、毎年、世界中から多くの派遣要請が寄せられています。中でも、近年希望が多いのが日本アニメーションの紹介です。2005年度には、日本動画協会のアドバイスも得ながら、計5件の派遣事業を実施しました。

**中南米3カ国と東欧3カ国、米国で、
ワークショップや上映会、サイン会を実施。**

◆ポケモンの作画も手がけた(有)動画工房社長・石黒育氏が渡航した中南米3カ国（ブラジル、ウルグアイ、コロンビア）では、子どもや学生を対象に開催した作画ワークショップで1枚1枚丁寧に指導する石黒氏の姿が好評を博しました。

(株)テレコム・アニメーションフィルム社長・竹内孝次氏による製作現場からの説得力あるレクチャーと作品上映には、東南アジア4カ国（シンガポール、ブルネイ、マレーシア、ベトナム）の多くのアニメファンが目と耳を傾けました。

また、企画を担当した「東京ゴッドファーザーズ」（今敏監督）を携えて東欧3カ国（ルーマニア、ハンガリー、ロシア）を巡回した(株)マッドハウス取締役・丸山正雄氏のレクチャー・上映会では、その寒冷な気候とは裏腹に、各会場ともアニメファンの熱狂的な空気に包



●石黒育氏によるワークショップの様子

まれました。

米国に目を転じれば、海外でも人気の高い「カウボーイビバップ」「サムライチャンプルー」の渡辺信一郎監督の生の声に、デトロイトとヒューストンのファンが長いサイン待ちの列を作って応え、マイアミとデンバーでは、押井守監督「攻殻機動隊」を初め、多くのTV・劇場作品の制作を手がける(株)プロダクション・アイジー社長・石川光久氏のレクチャーに聴衆からの質問が絶えませんでした。

中学高校教員交流（招へい）事業

Teachers

**世界各国の中学高校の先生方を招き、
日本の教育・文化・産業などを紹介。**

◆ジャパンファウンデーション設立の翌年から始まり33年間継続している事業です。毎年世界各国の中学校・高等学校の先生方を招いて、日本の教育・文化・産業等の様子を実際に見てもらい、日本各地の学校関係の方々や生徒たちとの直接の交流を通じて、日本の理解を深めてもらっています。2005年度には、56カ国から213名を招へいしました。



感性を **開く**

文化人短期招へいプログラム

各国を代表する芸術家や著述家、 文化団体のリーダーなどを日本に招待。

◆このプログラムは、これまで日本と接点のなかった海外の文化人を日本に招き、日本文化に触れ、日本人と交流する機会を橋わたしするという、出会いと発見を重視するタイプの文化交流事業です。



●築地市場のマグロ競りを視察するロレンサート氏

全世界から、それぞれの国を代表する芸術家・著述家・文化団体の長など文化人の推薦を募ります。年間に平均して30名前後の候補を選び、「15日以内の短期間日本を訪れて見ませんか」と招待します。

招待を受諾した文化人は、日本

についての関心やイメージに添って、日本で行きたいところ、会いたい人物などのリストを送ってきます。ジャパンファウンデーションはその専門性を加味して最適の日程をアレンジし、通訳などを手配して、文化人の「出会いと発見」を手助けします。

このプログラムでは、招へいされた文化人の感性と、出会う日本人の感性、さらにその間で橋わたしするスタッフの感性がしのぎを削ることとなります。

ブラジルの食文化ジャーナリスト ロレンサート氏は日本食の心に触れる。

◆2005年秋に来日したブラジルのアルナルド・ロレンサート氏は、発行部数で世界5位の雑誌「ヴェージャ・サンパウロ」の食文化ジャーナリスト。食を越えて文化を考察するその文章は学術的評価も高く、注目の食文化評論家です。

日本では代表的な料亭、レストランから一膳めし屋、

食品メーカーまで訪れました。泊まった旅館では納豆2パックをべろり。そもそも彼の最初の日本食との出会いは少年時代、出身地サンパウロの近所に住んでいた日系人のおばあさん手作りの日本食でした。

今回の初訪日では、日本食の奥に潜む哲学を語り合い、詳細に記録を採り、数多くの出会いから貴重な情報を得て「私はほんとうにラッキーだ。オリジナルのもつすばらしさを伝えてゆきたい」と力強く語って帰国の途につきました。

パキスタンのジャーナリスト マスード氏は「はだしのゲン」公演を見て絶句。

◆同じ頃にパキスタンから迎えたのは、ジャーナリストであり、異分野の国際・平和問題専門誌「リーダーズ・パブリケーションズ」編集長のアガ・マスード・フセイン氏。核兵器廃絶論者として著名です。

自らもかつて印パ戦争で姉妹2人を失った彼は、広島を訪れ、かつて同市民が一瞬にして受けた被害を思っ涙し、東京では東京外国語大学の学生によるウルドゥー語劇「はだしのゲン」を観て感激のあまり絶句しました。

「パキスタンで核廃絶を訴えることの道のりは決して平坦なものではない。私は『はだしのゲン』をぜひわが国民に見てもらいたい。日本人がパキスタンの言葉ウルドゥー語で上演するこの劇から、人々は必ず何かを感じるだろう」

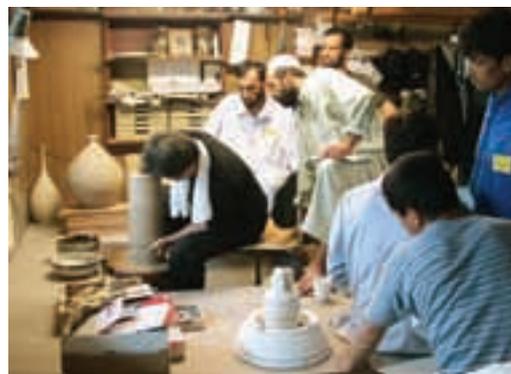
氏の熱意にうたれ、学生劇団は2006年9月にほとんど自費による同国での公演を決行、大きな反響を呼びました。

アフガニスタンの陶工を日本に招へい、研修(文化協力)

◆アフガニスタンのイスタリフ郡(カブール北部)の陶工、行政官、現地NPOスタッフ計15名をユネスコ・カブール事務所との共催で日本に招へいしました。2005年7月の12日間、岐阜、愛知、愛媛、大分、福岡、東京の教育・研究機関や、製陶業工場、窯元などを訪問。日本の陶芸文化・技術の視察や、研修、関係者との意見交換等を行いました。同招へいは、戦争により破壊された伝統工芸・イスタリフ焼きの復元に取り組む人々を支援しました。

この事業は2003年にアフガニスタン文化振興支援の目的で、日本から調査団を現地へ派遣しましたが、

その調査に続いて実施されたものです。



●砥部(愛媛県)の陶芸家の工房視察